

# 変革するスポーツビジネス Vol.1

スポーツと商業を融合させた『いわき FC パーク』のフラットな場所づくり [1/2]



ラグビーワールドカップ、オリンピック・パラリンピック、ワールドマスターズゲームズの連続開催が始まり、いま日本は『ゴールデン・スポーツイヤーズ』を迎えている。政策的なスポーツ成長戦略にも後押しされ、これまでの教育的・部局的な精神が美德とされるイメージの強かったスポーツに、「ビジネス」として産業化される大きな変革期が訪れている。モノからコトへ消費の価値がシフトするなか、その瞬間の“ナマの体験や感動”を与えるスポーツが持つ力は、集客に悩む商業施設にとって魅力的で、新しいコンテンツとしての可能性を感じる。現在、様々な形でスポーツをミックスした開発が模索され、スポーツと商業、生活者の関係性は新たなステージへと進んでいこう。今回はその変化の兆しをいち早く掴み、さらには街づくりの一翼を担う『いわき FC パーク』に取材を行った。その魅力を分析し、今後のヒントを探ってきたい。

## ■施設概要

現在、東北社会人サッカーリーグ1部に所属する『いわき FC』のトレーニング施設。民間企業による商業施設併設の複合型クラブハウスとしては国内初の事例となる。



**1. いわき FC パーク** フィールドに繋がるクラブハウスと、フィールドを一望できる商業ゾーンを持つ複合施設。チームカラーの『KING レッド』を使ったインパクトのある外観も印象的。



**2. ドームいわきベース** (株)ドームの物流センター。地域の雇用を生み出しており、若者が中心となって活気溢れる雰囲気。カフェテリアやレストスペースも充実。



**3. いわき FC フィールド**  
13,000㎡の人工芝フィールド。サッカーコート1面、フットサルコート2面。スタンド席は400名収容。



**4. いわき FC ステーション**  
アスリートのための食事提供や多目的スペースとしていわき市の支援を受けて整備。合宿の誘致や大会の開催、コミュニティスペースとしての貸し出しなども行う。

【いわき FC パーク施設データ】  
開業：2017年7月15日  
敷地面積：29,643㎡  
事業者：株式会社ドーム  
運営：株式会社いわきスポーツクラブ  
コンテンツ：9店舗（物販2店 / 飲食4店 / サービス3店）  
公式HP：http://iwakifcpark.com/



## ■誕生ストーリー

(株)ドームは、米国『アンダーアーマー』の日本総代理店や、スポーツサプリメント『DNS』の製造・販売などを行っている。もともと(株)ドームといわき市には直接の関係はなかったが、きっかけは2011年の東日本大震災からの復興だった。支援のためすぐに救援物資を乗せた車で被災地へ向かった。車の燃料が半分になった地点で物資提供を行おうと考えており、それがちょうどいわき市だったという。しかし義援金や寄付金などの援助では「真の意味での復興支援」とは言えないと考え、街に根付いた復興、つまり雇用を創り出し、街へ持続的に貢献できる復興を目指し、物流センター移転の計画を始めた。

また、(株)ドーム代表取締役の安田氏と同級生である大倉氏は、スペインでスポーツマネージメントを学び湘南ベルマーレの社長として活躍していたが、日本のクラブ経営と海外との違いに疑問を抱き、安田氏との再会を機に(株)いわきスポーツクラブを設立。「スポーツを通じていわき市を東北一の都市にする」というミッションを掲げ、スポーツの産業化を目指した。

ここで重要なのは、スポーツを試合成績や選手育成だけで考えるのではなく、持続的に利益を生み出す仕組みを自ら考え、作り出し、「ビジネス化」することだ。今、スポーツをビジネスコンテンツとして取り組む『いわき FC パーク』がモデルケースとして注目を集めている。

### 【(株)ドームと(株)いわきスポーツクラブの簡易年表】

1996年	(株)ドーム 設立 テーピングなどスポーツメディカル商品の輸入販売
2011年	東日本大震災 ・いわき市へ物資提供
2015年	(株)いわきスポーツクラブ 設立 ・大倉氏 代表取締役に就任 ・「いわき FC」の運営を引き継ぐ
2016年	「ドームいわきベース」稼働開始
2017年	・いわき市、いわき商工会議所など関係団体との「夢・感動・未来づくり」共同宣言 発表 ・「いわき FC パーク」グランドオープン ・「スポーツによる人・まちづくり推進協議会」設立

図はレゾナンス・ラボにて作成、特記なき写真はすべて筆者撮影による



# 変革するスポーツビジネス Vol.1

スポーツと商業を融合させた『いわき FC パーク』のフラットな場所づくり [2/2]

2019年9月24日  
伏見 百代



## ■『いわき FC パーク』から読み解く施設作りのポイント

『いわき FC パーク』は、プロチームならではの専門性とエンターテインメント性をバランス良く活かしている。昨今の健康ブームは、複合型から専門特化型の施設が増加傾向にある（TABLOID#2 参照）ように、人々の興味、関心はより専門度を増している。プロ選手が信頼するトレーニングマシン、グッズ、身体的メンテナンスは、健康を求める一般の人々へも強く響く。さらに、エンターテインメント性のある他のコンテンツと組み合わせることで“サッカーをやらない人”への敷居を低くしている。このようにスポーツと他のコンテンツが補完し合いながら融合するには、**スポーツの持つ魅力とともにビジネス化する時の課題も正しく把握した上で活用し、チームと施設が長期的に育て合って相乗効果を生むことが要となる。**そのポイントを『いわき FC パーク』の例とともに紹介する。

### 専門的な要素

#### 1 プロチームならではの**専門性**

スポーツやトレーニングなどは素人にはハードルが高く感じる場合があるが、**専門家がいるというだけで安心感が生まれ、本格度が増す。**



◀ トレーニングジム。選手の利用以外にも一般向けサーキットトレーニングプログラム『いわき FC サークット』を開始。



▲ クリニック・リカバリーステーション。登録患者数は中高生、高齢者を中心に約550人。土日は内科としても受診できる。（要電話予約）



▲ 3階の飲食店には、サッカー日本代表専属シェフによる直営店も含まれている。（写真は Facebook @iwakifcpark より）

#### 2 子どもたちへの**教育**

スポーツを通して、身体能力はもちろん、学校では学べない精神面などの育成への期待は大きく、スポーツと教育の関係性はとても深い。

会費無料のアカデミーの開催や、幼稚園などを訪問するアウトリーチ活動なども積極的に行う。



◀ 英会話教室。アカデミーとも連携し、クラブハウス内で外国人講師による英語教育を実施。

### エンターテインメント要素

#### 3 白熱した**ライブ感**

目の前で練習や試合風景を見ることができるという事が何と言っても一番の特徴にあげられるだろう。熱気を伝えるシズル感は重要な要素だ。



▲ 3階のVIP ROOMからはフィールドが見渡せる。今年から新たに『PARK share』という時間貸しの事業も始まっている。



▲ ロッカールームからフィールドへ直結するブリッジ通路。登場シーンからライブの臨場感満載の演出。

#### 4 **健康的**なイメージ

自分が身体を動かしてなくても、関連した場所に居るだけでなんだかスポーティーな気持ちになってしまう。施設全体がヘルシーで爽やかな空気感に包まれている。



▲ 3階の飲食店もテラス席やフィールドを望める席が多く設けられている。（写真は Facebook @iwakifcpark より）

#### 5 **ファン**心理

素人でもゲームを見ているとつい応援したくなってしまいう“熱さ”や、ファン同士の一体感などが生み出せることも特徴のひとつ。



## ■未来へのチャレンジ

開業から丸2年経った『いわき FC パーク』だが、現在の年間来場者数は約30万人にのぼる。3年目に入り地元へ根付いて受け入れられてきた。今年から新たに施設を時間貸しする事業もスタートし、次のステップへ進むタイミングだという。

また、この湯本駅周辺の土地は温泉街であり、さらに街とのつながりを深めるため温泉組合の協力のもと、観光業へも貢献していく目標だという。

強みを確実に捉え収益力を強化させていく、今後のさらなるチャレンジに注目だ。



◀ 未来のドリームパース。今後の展望に関しては、スタジアムを中心とした街づくりについて、いわき市と協議していることだ。（パース：株式会社いわきスポーツクラブ）

## ■まとめ

豊かな自然に囲まれ、とても気持ちのいい場所だった。特に『いわき FC フィールド』は、直結のロッカールームからブリッジを渡ると、視界がぐると山に囲まれ、非日常的な光景が広がる。駅前の商店の方も「よくご飯を食べに行く」とのことで、まさにサッカー目的でなくても行きたくなる施設だった。

次号では、さらにスポーツビジネスの可能性を読み解きながら、今後のスポーツコンテンツと商業施設との関係性について考えていきたい。

### 夢になるのも きっかけ次第



運動嫌いの私であるが、体を動かすのが嫌いというわけではなく、スポーツ根性が苦手な運動を敬遠してきた。更には、引越しの多い幼少期だったからか「愛着のある地元」というものが無く、地元のチームを応援するなどの興味を持つきっかけがなかった。スポーツ施設とは一生無縁だと思っていたが、食という切り口は興味をそそり敷居をまたぐハードルも下がる。スポーツに興味がない！という気持ちも夢になる機会がいままで無かっただけでコロッとかわるのかもしれない。

特記なき写真はすべて筆者撮影による